

転出先における郷土への思いの出現に関する研究

—高知県出身の若年層を対象として—

1230527 細谷千夏

指導教員 中川善典

研究背景

高知県では多くの時期で転出超過の状態にあり、特に15～24歳の占める割合が大きい。対策の一つである回帰の推進のために、回帰に至るまでの転出後の生活に着目する必要がある。しかし地方から都市部へ移住した後の変化や個人的な要素を取り扱った論文はほとんど見られなかった。

研究目的

本研究は、都会への移住経験によってもたらされる都会および地元への認識の変化は、いくつもの・どのようなプロセスで構成されるのかを明らかにする。また回帰の研究における質的研究の意義を示唆することを目的とする。

研究方法

高知県出身かつ県外在住の大学生からインタビュー調査によりライフストーリーを収集する。インタビューを複数回において実施することで疑問を解消しつつ、一事例を詳細に記述・分析し、構成するプロセスを発見する。

分析結果

移住を基準に時間は二つに大別され、移住前は「地元にいる人の後押しで、憧れていた都会の大学との距離を実感してもなお挑戦しようとするプロセス」、移住後は「地元を離れたことで地元の友人の重みを確認したプロセス」と「都会での生活や帰省の経験を通して地元地域の魅力を発見するプロセス」という計3つのプロセスが明らかになった。各プロセスおよびプロセス間の関係性は図に示し、時系列や因果関係を簡潔に表した。

考察・結論

目的に基づき研究を行った結果、都会への移住経験によってもたらされる都会および地元への認識の変化は三つのプロセスによって構成されていた。今回の事例では、移住という経験が促した地方出身者の価値観の変化を通じて、都会と地元を対比させる方法にどのような影響を与えたかが明らかになった。またライフストーリー研究等の質的研究の重要性について論じた。